

「誰一人取り残さない」

この目標はとても解り易い。例えば目の前で崖っ淵に立たされている人がいる。その手を皆で引っ張りましょう。そして誰もが平等な権利を持って安全な所で幸せに暮らしましょう。という趣旨である。

私は先日、模擬国連で水について議論した。安全な飲み水が世界中に行き渡らないのは、ローカルの環境でも枯渇でもなく、社会の適切なガバナンスが不足しているからという結論に至った。水を考える上で大切なことは、ストックではなく、流れている量である。水は循環資源であり、その「質」を利用しているので汚染された水は無きに等しい。しかし、人々を貧困から救い出すためには経済発展を優先させなければならず、水質も温暖化も悪化せざるを得ない。途上国を発展させる分、先進国が躍起になってCO2削減案を出しているが、世界の排出量の四割を占める米中が首を縦に振らない。中国がCOPの中で途上国に属するのも大きな問題の一つだ。

貧困を救おうとすれば環境が悪化する。何かを改善するために、何かを犠牲にしなくてはならない。世界の問題はこじれた糸のような関係でつながっている。問題の元が何処かにある筈なのだ。私はそれを探している。早く見つけて本線をピンと張れば全てがほどけるようになればいいのに。

今年の春休みにベトナムへボランティアに行った時、私は世界の底辺を見たと感じた。ホーチミン市内にあるツーズー国立病院で枯葉剤三世や、月に三・四人のペースで捨てられて行く孤児院で活動したからだ。

同じ途上国の孤児院でも、カンボジアやセブ島の子どもたちは最低限のルールを守って生活していることが多い。しかしここでは略奪が普通に行われ、歯磨きに意味もわからず、教育はおろか、道徳的概念や秩序を現場で「育む」ゆとりが全く見受けられなかった。孤児四百人に対して教師が十六人という環境が「とりあえず生きていればなんだったっていい」という最低限のライフラインしか確保できない状況にあるためだ。

ベトナムは急速に経済発展した国である。上記のように経済発展を優先させた国なのに何故貧困が救えないのか。それは貧困の中で育った多くの子どもが、大人になっても最低賃金でしか働くことができないからだ。経済発展だけを急いでも、国の豊かさは継続しない。そこに住む一人一人が人権を取り戻し、質の高い教育を受けることが重要なのだ。

私はスラム街のストリートチルドレンが文字を学び、自分たちのことを記事にして国の問題意識を大きく変えた事例をテレビで観た事がある。彼らは記事にすることで正当な報酬を得て、出来高で貰える金額が違う事も知った。文字を学べばゴミの中で生きる事から脱し得る。そして教育によって善悪の判断の可能な大人になり、秩序を守って勤勉に働くようになる。やがてそれが国を豊かにする原動力になり、初めて経済発展が持続可能な社会になるのだと私は思った。

ベトナムで孤児を雇って飲食店を経営する人は、貧困は彼らにとって当たり前の日常だから満足して生活していると話した。私はその考えに強い違和感を覚える。

まず彼らは質の高い教育を受ける権利がある。質の高さは地域によって適切が異なるが、知恵を蓄えれば生きる意味や目標が見い出せる。そして日常の景色は劇的に変わるだろう。心理学者のアドラーが「人の向上心は欲望やコンプレックスから生まれる」と説くように、どの世界にいても現状に満足していい筈がない。学ぶ程やるべきことは増えるからだ。と同時に教育を得る意味は崖っ淵にいる人に気付くということが。私は手を指し述べる人材を増やすべく、積極的に教育ボランティア活動に携わって、世界のこじれた糸をほどく教育という本線を太くして行きたい。世界中の子が学べばガバナンスも最強になると信じて。